
捨てね娘

凧澤 唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てね娘

【Nコード】

N8842Y

【作者名】

凧澤 唯人

【あらすじ】

平凡な高校生活
なにも変わらない生活のなかを生きる男子生徒、ササクラ マコト 笹倉真琴
そんな真琴の幼なじみの性格最悪、自分に逆らえる男子はいないと
言う女王様、クルス ミユキ 来栖深雪
謎の女の子、ネコナエ ユズ 猫苗柚子

そんな三人がひよんなことから出会い、ひよんなことからゆるーい詐欺をし始める。

そんなコメディ。

*

作者、素人のために文才に疎い部分があります……

それでも大丈夫な方、お読みください…

詐欺と言いまして、政治や株は絡まない高校生ができる範疇でのゆるーい詐欺です。

ぶるるーぐ

風が冷たい

最近は暖冬だとか言っつけれど、甚だ疑問である。

首に巻いたマフラーの隙間から伸びる、携帯音楽プレイヤーのコードを指でいじくり回しながらの帰路。

普段は学校がある時間帯なのだが、今日は県民の日ということで休みなのだ。

ずっと家でごろごろとしていると、仕事で夜まで帰って来ない親のせいで昼飯をコンビニに買いに行った帰り。

商店街と自分の住む地区を繋ぐ長めの橋をだらだらと歩いていると、行きには反対側を歩いたから気づかなかった段ボールがポツリ。

中からは可愛らしくにゃーにゃーと鳴く声がする。

先ほど買って来た買い物袋のなかから半額で安売りされていた、魚肉ソーセージを出して段ボールに近づぐ。

案の定中には子猫が一匹。俺が覗き込むと明らかに敵意剥き出しで、箱の隅で毛布にくるまっている。

「なんだよ、怖がることないだろ」

自分は昔から動物には好かれならしい。散歩中の犬には吠えられ、飼っていたハムスターには必ず指を噛まれ、仕舞いには動物園の動物達から威嚇される。

悪いことをした記憶はないのに、だ。

「……はぁ……ほらよ」

いつまでたつても近寄つて来ない猫を見ていると段々と悲しくなってきたので、ソーセージを段ボールに放り込むと立ち上がる。

猫はいまだに警戒しているが、ソーセージを見るとこちらをジッと見ながらちよいちよいと手を伸ばしている。俺はそんな猫を見ながら少し和み、再び橋を渡りきろうと歩き始めた。

しばらく歩いているともう少し先に段ボールがもう一個。しかし何故か違和感が拭えない。

誰がどうみても明らかかな違和感。俺は一応、あくまでも一応先ほどと同じように魚肉ソーセージを取り出して近づいて行く。

「……………」

段ボールの中の生き物はこちらを見ると直ぐ様ソーセージに気がつき、明らかに期待した目をキラキラとさせながらこちらを見ている。

俺だって鬼ではない、先ほどより好意的な生き物に少しだけ嬉しそうに頬が弛んだかもしれない顔を擦りながらイヤホンを外し、ソーセージをその生き物の口元にちか寄せる。

すると、驚いたことにその生き物はソーセージを手で掴み、器用に食べ始めたのだ。しかもそれだけではない。

「……………美味しいっ」

喋ったのである。

ここでその生き物を見ながら考えた。インコだって喋る。猿だって手で掴み食べる。あり得ないことではないのだ。もちろん、人間

はこれらを両立しているが、寒空の中段ボールに入って震えること
はない。……とは一概には言えないが、大体はそうなので人間のせ
んはない。

ではなにか。

わからないので立ち去ることにした。

「ま、待ってくださーいっ！」

今、なにか聴こえた気がするが気のせいだ。イヤホンを再び耳に
はめれば幻聴は止み、家についたら全部わすれる。

「あう……」

イヤホンをつけてからだ、何故か目の前を先ほどの生き物がぴよ
んぴよこと跳ね回っている。まるでなにかを伝えようとしているよ

うだが、幻覚なのでスルー。

寒さが肌に刺さるようだとという表現があるが、それと酷似したものだと思えることにした。寒さが網膜と鼓膜を刺激し、あらん幻想を見せている、ということだ。

「むうう…とりやつ」

イヤホンがその生き物によって無理やり引き取られた、がそれはきつと風が吹いたのだらう。多分イヤホンの部分だけを鎌鼬的なにかが吹き抜けたのだ。

「えへへ、無視するから取っちゃいましたっ」

やばい、死ぬのかもしれない。

幻想が度を過ぎている。

あれか？今日が休みだからといって、昨晚夜更かしをしてゲームをやったからか？

それなら納得が……できる訳がない。

「…あーゆるーモンキー？」

とりあえず全国で使われている英語を自分なりに駆使してコンタクトしてみた。余談だが英語は進級はできる、といあぎりぎりである。そもそも英語って役に立つのか？

……閑話休題

「も、モンキー！？えと、あの、のーモンキー」

「こちらの言葉は理解できるらしく、なにやらぶんぶんと顔を振りながらそう言つとジリジリとこちらに詰め寄って来やがる。宇宙人？UMA？とりあえず、怖い。」

「えと、ごめんなさいっ！！」

こちらとしてみればそちらが嫌な訳で、いつ捕食されるかもわからないので顔を逸らしながらとりあえず謝ると、全力でその場から走った。

「っ！ ど、どこ行くんですか！」

急に走られると不意をつかれたらしく一気に差は広まる。後ろチラリとを振り返るとなにやら大きなキャスターバッグを派手に転がしながらこちらを追いかけて来てやがる。

しかし、俺をなめてもらっては困る。伊達に怠け者の真琴とは呼ばれてはいないのだよっ！

しばらく独走状態をキープをしていた筈なのだが、

「とりゃっ！……！」

……気づいたら後ろからかなり勢いよく体当たりをくらい、買い物袋に入っていた卵を絶対に割られないようにと自分を犠牲にして守りながら派手にこけていた。

自分を犠牲した成果として、卵は守れたのだが尋常じゃないくらい頬が痛い。顔の横をぎりぎりガードレールがあり、どうやらそれにかすっただけらしい。血で濡れているのがよく分かる。

「ふふふ、逃がしませんっ」

「いや、ふざけんな」

うつ伏せに倒れる俺の上に馬乗りになりながら笑ってやがる。腰の辺りに乗りながらぐわんぐわんと揺れながらこちらの背中を手をおいて「こつみえても音速の……いや、光速の……ゆずゆずとは呼ばれてないのですっ」と明らかに今作ったようなことを言いながらこちらの顔を覗きこんでくる。

「……おり」

「猿だとか、人を見た目で判断しちゃ……血がでてますっ！」

全くこちらの話を聞く様子はない。ただ一人で慌てながら茶色い髪の毛をばたばたと揺らしながら焦っている。つーか、お前のせいだ、間違いなく。

というか恥ずかしい。人目とかそういう問題ではなく単純にこんな格好と言つのがである。そう思いながら身体をよじらせていると上でがっしりと態勢を保ちながらなんかぶつぶつ言っている憎き生き物の顔が近づいてきた。

「えと、えと、応急措置しなきゃっ!！」

その後、頬にざらりとした感触。

応急措置という項目で傷口を

ペロリと舐められた。

どつやら動物に嫌われ、『捨て猫』に嫌われるらしいが、『捨てね娘』には好かれる体質らしい。

ぶろろーぐ（後書き）

ふー、疲れたー

素人だけど頑張ってきた気がする。

お読みいただきありがとうございます

よかったら次回も温かい目で見守ってください…

1話 日常の側には非日常

頬を舌がはい回っておりその違和感に腕じゅうに鳥肌がたった、と思えばその直後に傷口を刺激する痛みにも身体を跳ねさせる。

そんな俺の身体を押さえつけながら未確認生物はこちらの表情などお構い無しに、傷口をまるで赤ちゃんみたいに吸い付いてきやる。

「いつてーっよー!!」

流石になにをされたのかがきちんと把握できてきて、つい勢いよくそいつの顔をがしりと掴むと引き離れた。その際に垂れ下がった髪の毛までもが傷口に触れて痛みを再発させる。

「…血、なくなりましたっ!」

何故かはわからないがこちらが怒っているというのにそいつは満足そうに小さくガッツポーズをとりながらにこにことしている。

ああ、可愛いななどと思える訳もなくふつつつと燃える怒りを抑えながらそいつの肩を押して、ずるずるとほふく前進のようにながら脱出を試みる。もちろん卵は脇において安全を確認してからの行動である。

「…あははっ、面白っ」

「ぶっ飛ばしてやろうか?」

「……………ぶっ飛ばす？」

そいつの下から脱出に成功すると明らかにそんな俺を見て楽しんでいたらしく、手をぱちぱちと叩きながら呑気なことをほざきやがる。しかも脅しても動揺するわけでもなく、可愛らしく小首を傾げ始めた。

どうしたらこいつに一泡吹かせてやれるのだろうか。じろじろと顔を見ながら考えるがそんな俺を見ながらにこにことしている大きめな目。走ったり、突撃などをしたからか多少ボサボサになった茶色く染まったロングのストレートの髪の毛。寒いなか走ったために少々赤くなつた童顔フェイス。

「……………」

まったく非の打ち所がないんですけど。どうしよう、じろじろ見たせいなのか照れ始めたそいつを見ているとこっちまで恥ずかしくなつてきやがった。

「…帰る」

「はいっ！」

「いや、着いてくんなよ？」

「……………？」

買い物袋を手にとって歩き始めた訳なのだが、当たり前というようにバックを手を持ちながらついて来てやがるし。注意をすれば自

分のことだとは思っていないらしく後ろを振り返りながら「誰もいませんよ？はっ！？幽霊！？」「無駄に可愛らしくおどけてやがる。

ちなみに靈感は自分にはないと自負している。あつたつて得するわけでもなければ、コミュニケーションもとれない。なにより、怖い。

……閑話休題

「あのさあ、迷子なの？いや、そうだよな？わかった警察行こうか」

「……警察」

こいつともコミュニケーションがとれる気がしないので一方的に話を進めていくと橋を渡り終わった場所にある交番を指差す。その言葉に敏感に反応したのを俺が見逃すわけがない。これはこいつはただの生き物ではないというあらわしだろう。きっと警察に追われて

「……うぐっ、ぐすっ、うわーん！！」

そんなことはなかった。

っーかなんで泣き始めたんだよ！ほら、警察さんが泣き声を聴いたからかこちらに駆け足できてるもの。どっしると？

「ちよ、なあ、泣きやめって」

「ぐすっ、ひぐっ、着いて行っていい？

「いや、それは話が別だろ？」

危うく誘導尋問のような会話に騙されかけるが冷静な俺。冷たくそいつに笑いながら言うが、それを聞いた瞬間には更に大きな声で泣き始めた。それ見た警官わりとガチでこちらに走ってくる。

「君、どうしたの？」

警官は明らかに作り笑いを浮かべながら俺ではなくそいつに聞いているかと思えばがしりと俺の腕をがしりと掴んできた。もしかして疑われているのだろうか。大丈夫だ俺は悪いことはしていない、っ！かこの生き物何歳だよっ、絶対俺と近い年齢だぜ？いい歳して泣いてんじゃねーよ！

「ぐすん……お兄ちゃんが、お家に入れてくれないの」

ぐちゃり

足元で手に大切に持っていたはずの卵が見るも無惨な姿で落ちていた。なにやら幻聴を聴いたせいで動揺して落としてしまったらしい。道路に垂れる黄色くねばついた液体を見ながら冷静に考える。

「お兄ちゃんが、ゆずは嫌いだから……着いてくるなって」

「……君、電話番号教えてくれる？」

警官が明らかにこちらの腕を掴む力を強くしながらまるで尋問みたいに強い口調で質問してくる。なにをしたのか全く心当たりがない、どこるか妹などいたかどうかも記憶にない。

「……いや、その……」

やたら気温が暑くなってきた気がする。だらだらと汗を流しながらもごまかす方法を必死に考えている脳。警官に声を掛けられるという初体験に目の前がくらくらという目眩に襲われる、気がした。

すると何故だかはわからないが自分の腕を掴む手が離されていた。顔を上げてそちらを見ると未確認生物が警官の腕を引っ張りながら警官を睨んでいた。

「お兄ちゃん、いじめないでくださいっ」

警官がその生き物の言葉に感動したのか生き物を見ながらうつろうと目を潤ませたのを見た瞬間、何故だかはわからないが俺は、その生き物の手を掴むと走り始めていた。

「こ、こら君っ！！」

不意を突かれたからか警官は目頭を押さえていた手を離すとこちらに駆け寄って来るが、運がよかつたらしく先ほど落としてしまった卵に足を取られてこけている。

それから俺達はなぜか全力で走っていた。

悪いことなどしていかないのにただひたすらに逃げていた。

風をきり、肺が酸素を求めてひゅーひゅーと音を立てて呼吸をし

て噎せながらも走り

しばらくすれば自宅についていた。こんなときに限って鍵穴にうまく鍵がはまらない。何度かガチャガチャとしながらようやく鍵を回すと後ろに立っていた未確認生物が鼻歌を歌う余裕があったらしく、ふらふらと歩きながら

「笹倉くん、かあ」

表札を見ながらにこにことしていた。

その顔を見ると涙の筋など無い。

それどころか笑っている。

そして、ここは俺の家。

……嵌められた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842y/>

捨てね娘

2011年11月27日05時45分発行